



# Håf a A d a i

令和 5 年 8 月 25 日  
グアム日本人学校  
学校だより  
9 月号  
校長 井手瑞樹

## 戦争と平和（グアム解放記念日）

ひと月前の7月21日は、グアムの、日本軍占領からの解放記念日でした。2023年の解放記念式典が、ハガニヤの聖母マリア大聖堂での礼拝の後、グアム博物館前で開催されました。例年は、村ごとに、慰霊の催しがパレードとともに行われているとお聞きしておりますが、今年は台風のために準備が間に合わず、一堂に会しての式典という形になったそうです。

大聖堂では司教のお話があり、その中に、**Japan** という言葉を何度も聞きました。チャモロ語でしたが、



おそらく日本軍占領からの解放について述べられていることを感じ、身の引き締まる思いがいたしました。

続いて、博物館前において、グアムの各村の代表者やグアム戦の体験者、グアム知事、日本の総領事、アメリカ軍が参加しての慰霊式典が行われました。その中で、グアム戦の体験者の方の生々しい体験談は、英語を十分聞き取れない私にさえ、その残酷さが伝わってきました。それも時々ジョークを交えながらのお話ただけに、日本軍の行った行為に対し、戦時下の出来事とはいえ、その言葉の一つ一つが胸に刺さりました。また、司会者の方が、各村で日本軍に殺害された方々の数を報告されているのを聞き、周りの空気が凍り付くような緊張した雰囲気と申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

しかしそんな中、様々な所で目にし、耳にした、**"Never forget, but forgive !"** という言葉の意味の深さと重さに圧倒された感があります。家族や親戚、友人を殺された恨みは決して忘れることはできないでしょう。しかし、それでも自分が、家族が、そしてグアムが前に進み続けるにはそれを許すことが必要だと、自分に言い聞かせるような悲痛な叫びにも聞こえます。私たちは心しなければなりません。



日本でもこの時期、終戦の日に合わせて様々なテレビ番組が組まれます。ある番組の座談会で、「なぜ戦争は起きるのでしょうか。」と問いかけられ、これという明確な回答が返ってきませんでした。見識者の一人が、「実は、どんな研究者にもその答えは分からないのです。」と発言されたのが印象的でした。

私は、次の話を聞いたことがあります。「戦争は、時の支配者が、**恐怖心と威信と欲望**のもとに、引き起



こしてきた。」まさに、今のロシアがウクライナに仕掛けた戦争を考えると、この言葉がぴったりと当てはまるような気がいたします。広大な土地を持つロシアですが、国境に高い山を持たないという地勢的な特徴をもつロシアは、歴史的に他国の侵略を受けてきました。したがって常に他国の侵略に対する恐怖心を持っているのです。これに対するロシアの防御は、先に他国を侵略するという攻撃的な姿勢をとらざるを得ない。さらに、宗教に絡む威

信と欲望については、皆さんもご存じではないでしょうか。

前述のテレビ座談会に戻りますが、日本人と外国人の「平和」に対する考え方の違いを感じました。日本

人の出席者は、相手と友好的な姿勢を保つことに重きを置いていたのに対し、外国人の出席者は、平和を手に入れ、維持するために、抗議することを含め、自ら行動を起こすことを主張していました。平和とは、黙っていれば手に入るものではないでしょう。やはり手に入れるべきものだと感じます。しかし、行き過ぎて身勝手になるとまた戦争になるという危険性をはらんでいるところが難しいところです。

我々教育に携わる者（保護者を含めて）にとって、子どもたちとの日常の関わり合いの中で、争いにつながるような人間関係の要因を排除しつつ、同時に、集団の中において人間のとりがちな考え方や行動、弱さを教えながら、いかにして円満な社会を築いていくかを考えさせ続けることが大事だと思います。それが戦争を回避し、平和を長く維持することにつながっていくものと、グアム解放記念日を機に、考えを新たにいたしました。

